

東京での関係強化とさらなる発展を

2017年11月2日投稿者Ryan Piurek

元外務省次官の藪中三十二氏は、先月、ある日本の新聞に掲載されたコラムで、インディアナ州をアメリカで最も親日的な州だと述べました。藪中氏は、ホンダ、スバル、トヨタをはじめとする多くの日本の主要企業や自動車部品企業が、インディアナ州と地元労働市場に多額の投資を行ってきたという事実を引用し、その理由を説明しています。

Indiana Economic Development Corp. (IEDC)の統計によると、280社以上の日本企業がインディアナ州で事業を展開しており、58,000人以上の地元住民を雇用しているとのこと。米国全州のうち、インディアナ州は、一人当たりの日本からの投資額が最も多い州となっています。昨年、インディアナ州は、日本に16億ドルの製品を輸出し、日本は現在、同州の第5位の輸出相手国となっています。イーライリリー、クックメディカル、カミンズ、Urschel Laboratories、ジンマー バイオメットなど、多くのインディアナ州をベースとする企業が、日本で事業を展開しています。

インディアナ州には280社以上の日本企業があり、58,000人以上の地元住民を雇用しています。

マイク・ペンス副大統領は、日本の州経済への影響力を重視し、インディアナ州知事時代には何度か日本を訪問しています。また、エリック・ホルコム現州知事は、インディアナ州と日本との関係を裏付けるさらなる事例として、藪中氏の記事のにもあるように、日本人ドライバーの佐藤琢磨氏が、今年のインディアナポリス500でチェッカーフラッグを獲得したことを挙げる人もいるかもしれません。

日本との懸け橋としての役割: インディアナ大学の取り組み

藪中氏のコラムでは紹介されていませんが、インディアナ大学(以下IU)が、1世紀以上もの間、高等教育における日本との懸け橋の役割を果たしてきた事実を忘れるわけにはいきません。

日本と米国の主力大学との長年の関係を考えた時、最も日本との関係が深い大学として真っ先にIUを挙げる人も多いはず。です。

IU初の北米外からの同窓生である岡田猛熊氏は、早稲田大学を卒業後、1891年にIUで修士号を取得しました。IUの留学生のミヤカワ マスジ氏は、同大学のロースクールを1905年に卒業後、日本人ではじめてアメリカの法曹界の一員となった人物です。1900年代初めには、日本人を対象とした人種差別に反対する公民権運動のパイオニアとして長年、我が国と日本との理解を深めるために尽力しました。

さらに初期のIU日本人同窓生の中には、1909年に化学の学士号を取得したポール・イソベ氏がいます。彼は後に大変な実業家となり、日本の大豆加工産業と化学工業の発展に貢献しました。



左から2番目、日本の実業家、化学者のポール・イソベ氏。1909年、IUを卒業。1959年、元恩師2名とともにIU化学研究室を視察。写真提供、IUアーカイブコレクション。

以来、長年にわたり、IUは、州内の各キャンパスにおいて日本の学者や政府高官の訪問を歓迎してきました。現在の学生、教職員の多くは、個人的、学術的に日本と緊密な関係を築いています。昨年、70人以上の日本人留学生在IUで学びました。現在、最も活発に、そして献身的に親善大使としての役割を果たしてくれているのは、1,500人以上にのぼる日本人の同窓生です。(この点については、後程詳しく説明します。)

IUの日本人同窓生の多くは、IUの国際同窓会の中でも最も古い日本支部のメンバーです。日本支部は、2014年に創立50周年を迎えました。日本支部は、20年近く支部長を務めた安藤馨氏によって創設されました。安藤氏は、日本のIBMとも呼ばれる世界有数のコンピュータメーカーの一つである富士通の創設者の一人です。IUは、安藤奨学金の多大なる恩恵を受けており、この奨学金のおかげで、同校の学生が日本で勉強する機会を得ていることは、喜ばしい限りです。

新たな絆の創造を目指して

IUの日本人同窓生の祝賀会は、ここ東京で水曜日の夜に行われる予定です。祝賀会に先立ち、Michael A. McRobbie学長とIU代表団は、国際交流基金の理事と会談しました。国際交流基金は、1973年に創立され、世界各国との文化交流プログラムの促進を目的とした日本で唯一の機関です。ミッションの一環として、日本と他国の国民間の相互理解を深めることを掲げています。

会談では、IU代表団と国際交流基金の代表双方の関心事項である、インディアナ州と日本間での学生と教員のモビリティの促進が議題となりました。また、IU代表団は、同大学が数十年にわたり日本

研究の分野においてあげてきた成果を、そして現代日本、さらには東アジア研究の分野においてアメリカ中西部の主要な研究拠点になるという目標を、国際交流基金の代表側と共有することができました。



IU代表団は、国際交流基金の理事との会談で、IUと日本との間の学生のモビリティの推進について議論しました。

都心にオフィスを構えた国際交流基金本部で、IU国際交流局のDavid Zaret副学長と、元米国ポーランド大使でありIU School of Global and International Studiesの学部長でもあるLee Feinstein氏が、IUの東アジアの言語、文明、社会研究において、中心的役割を果たしているブルーミントンキャンパスのDepartment of East Asian Languages and Culturesの活動について、熱弁をふるいました。

IUには、東アジアの言語を学んでいる学生が700人います。同学部は、東アジアの文学、歴史、政治、宗教、芸術に関する幅広いコースを提供しており、日本の政治と文化の深い理解を目指し、日米関係の教育と研究に力を入れています。

今日の会談には、IUのSchool of Global and International StudiesのEast Asian International Relations Security Studies助教授Adam Liff氏も代表団と共に参加しました。Liff氏は、日米関係、地域安全保障問題、最近の日中貿易・投資に対する政治的緊張の影響などの研究のため、東京大学に現在6ヶ月滞在しています。ブルーミントンのEast Asian Studies Centerは、1979年以来、大学の東アジア地域研究を、ビジネス、教育、政府の様々なニーズに結びつけてきましたが、同氏は、当センターを構成する東アジア言語文化学科およびIUの他のスクール、学部の一員でもあります。

「ポリシー主導の奨学金」への関心が高まっている今、多くの日本の投資が集中している米国中西部に、現代日本と日米関係の研究の拠点を作ろうというSchool of Global and International Studiesの理念は、国際交流基金のリーダーたちに強い関心を持って受け入れられました。会談では活発な意見交換がなされました。同基金のメンバーは、IUと日本を代表する教育機関との間の学生、教員の交流の促進、研究協力の強化への支援を約束しました。その高揚感は、水曜日に、McRobbie学長がウィリアム・F・ハガティ駐日米国大使と会談した際に、そして、日本の大学の国際化や学生のモビリティ促進に取り組んでいる機関である文部科学省の高官とのその後の会談において共有されました。

「ホームラン」だった祝賀会

IU代表団の東京でのあまりにも短い時間は、IUの日本人同窓生とその半世紀の歴史を持つ同窓会

日本支部のお祝いで終了しました。しかし、水曜日の夜のイベントの高揚感は、すぐに減速することはなさそうです。

この祝賀会は、様々な意味で「ホームラン」でした。今回の訪問で、McRobbie学長は、早稲田大学の招待により、IU野球チームの1922年日本遠征95周年を祈念するものとなりました。IUアーカイブに素晴らしいストーリーが記録されています。そのパート1とパート2は、IU Archivesのウェブサイトで閲覧することができます。IU野球ファンなら是非この感動のストーリーを読んでいただきたいと思います。IU野球チームの日本遠征は、日本とインディアナの友好関係だけでなく20世紀初期の国際理解を促進するものとなりました。日本でもインディアナでも熱狂的なファンと共に「大ヒット」を飛ばしたのです。IUの授業は早めに打ち切られ、初期の野球チームでプレーしたこともある第10代学長、William Lowe Bryan氏を含む3,000人もの方が駅まで出向き、チームを見送りました。

IU Archivesコレクションの写真は、IU同窓会日本支部の皆さんのために水曜日の夕方のイベント会場で展示されました。McRobbie学長は、IU野球チームのシンボルである赤と白のグローブを早稲田大学留学センターの篠田徹所長にプレゼントしました。その後、学長は、同窓生皆が見送る中、会場を後にしました。



IU野球チームの1922年の日本遠征は「大ヒット」に。写真提供、IUアーカイブ コレクション。

McRobbie学長は、このような国際同窓生の集まりの慣例として、過去数十年間ブルーミントンを訪れていない日本人同窓生のために、IUの最近の目覚ましい業績を報告し、ここ数年の間にオンライン化された新しいスクール、学部、主要学術プログラムを紹介しました。

McRobbie学長は、IUの最も名誉ある2つの国際同窓生賞を発表しました。学長は、公職や公共サービスの分野において顕著な業績を残しIUの価値の向上に貢献した人物に授与されるThomas Hart Benton Mural Medallionを、著名な日本のビジネスリーダーである伊藤日出夫氏に授与しました。伊藤氏は、IUのKelley School of BusinessでMBAを取得した後、Toshiba American Electronic Componentsの会長兼CEOを務めるなど、36年間、東芝で活躍しました。さらに、McRobbie学長と共に今回の東京訪問の実現に貢献したIU国際交流局のZaret副学長は、IBMアジア パシフィック サ

ービス コーポレーションの元マネージャーであった服部恭典氏 (MBA、IU Kelley School of Business、1969) にDistinguished International Service Awardを授与しました。

イベントの締めくくりとし、IUのJacobs School of Music同窓生であるRobert Ryker氏とJohann Schram Reed氏は、火曜日の夜、東京都劇場にて、ブラームスのドイツ・レクイエムのパワフルなパフォーマンスを披露し、それに刺激されるように、出席者はIUの戦いの歌を合唱しました。

これは、IU代表団の忙しくも成果のある日本訪問のすばらしいフィナーレとなりました。そして、IU代表団にとって、何千キロも離れている日本においてもIUの精神がしっかりと共有されていることを再確認できたことは、大変有意義な体験だったと言えるでしょう。



国際的な業績を認められ、Thomas Hart Benton Mural Medallionを授与されたIUの卒業生で著名なビジネスリーダーでもある伊藤日出夫氏。



1922年のIU野球チームの日本遠征を記念して、早稲田大学留学センターの篠田徹所長にIU野球グローブを贈呈するMcRobbie学長。



今年53年目を迎えたIU同窓会の日本支部を祝福するIU代表団。